

五月号

〈幼児〉 しろいくつ

〈小二〉 あかるいはる
花いっばい

みどりのの山

〈小四〉 夏も近づく
八十八夜

茶つみが始まる
わか葉のお茶畑

〈小六〉 月のゆく道、空の道
木のこずえから
白い船のマストから
真つ直ぐな青い道

朝は七時
片岡に露みちて
揚雲雀なのりいで

〈中学〉 時は春、春蓮朝

〈入門〉 片岡に露みちて
揚雲雀なのりいで

〈実用部〉 鳥の歌声がいつも同じ調子にしか

聞こえてこないというのは
無頓着な人間の
粗雑な耳だけのことです

〈鑑賞部〉

滝のおとは たえて久しくなりぬれど 大納言公任
名こそ流れて なほ聞こえけれ (百人一首)より

〈臨書部〉 雁塔聖教序

楮遂良

六月号

〈幼児〉 かえるのこ

〈小二〉 雨上がり
木のはがキラキラ
ひかつてる

ひびいてる

〈小四〉 だれかが鳴らす
草ぶえが
山の道に
ひびいてる

山道に

〈小六〉 花びらを寄せ合
小さなしずくを
だいた あじさいは
あらつたばかりの顔の様

上総はいわしの大漁だ

〈中学〉 田圃の田圃の 山椒の木

〈入門〉 おいらが父さん いつ帰る
聞かせてくれぬか 山椒の木

野口雨情
「山椒の木」

〈実用部〉 雨上がりの畝の麦が
目だつて伸びるのを見る

永い 昼下がり
桑畑で蚕が成育するのを見る

〈鑑賞部〉

春すぎて夏来にけらし 白たへの 百人一首より
衣ほすてふ 天のかぐ山 持統天皇

〈臨書部〉 雁塔聖教序

楮遂良